

幼児の自我の発達に関する行動評定

— 地域差及び母親の意見からの検討 —

研究第5部 望月 武子

I 目的及び方法

1. 昨年度にひき続き、自我の発達の行動評定を意図して、発達に関わる要因を明らかにするため資料の分析を行った。1) 前年度収集した資料に基づき発達状態の地域差を確認した。ここでは比較的調査数の多い5歳児のみをとりあげた。2) 評定項目の行動について母親がどのような意見をもっているか、子どもの年齢との関連で検討した。調査対象は3歳から6歳の幼児をもつ母親682名である。

2. また、行動評定の実際的な適用を検討するために愛育相談所へ来所した子どものうち知的には正常範囲にあるが、日常生活の中で適応上に何らかの問題や行動上の問題を示した子どもに対し行動評定を行い、心理臨床所見と照合して結果を検討した。

II 結果

1. 発達の地域差

調査対象を地域の特性により東京A地区、東京B地区、埼玉地区に分類した。東京A地区は都心に近い山手の高級住宅地であり、東京B地区は城南の庶民的な住宅地、埼玉地区は県の中央部にある都市で東京のベッドタウンとしての特性をもつ地域である。

地域により評定段階の構成比に差がみられるものを示したのが図1～3である。図の中の*は $p < 0.05$ 、**は $P < 0.01$ 水準で有意差が認められたものである。

自己実現の領域では差がみられたのは3項目であり、項目9、20では発達が東京A < 東京B < 埼玉の順になっていて、都心地区ほど友だちとの交流における自発的行動が制約されていることが明らかであった。(図1)

自己統制の領域で差がみられたのは5項目であり、これらの項目については東京A > 東京B > 埼玉の傾向が目立っていた。項目18は埼玉地区が他の地域と比べて行動の達成度が高くなっていったが、この地域の幼稚園バスによる送迎を行っており、これが子どもの行動に影響を

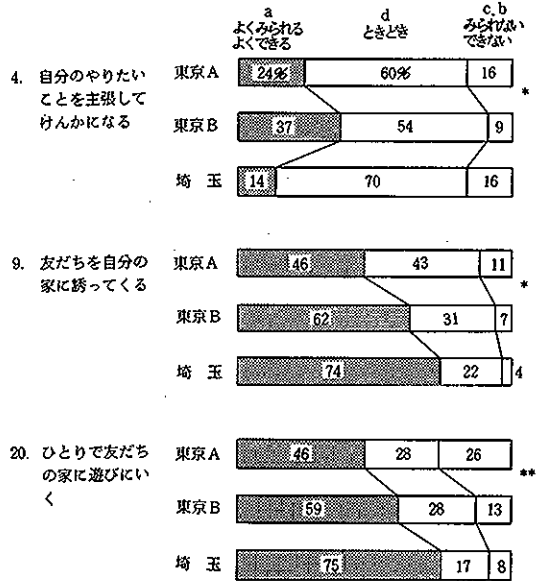


図1 発達状態の地域差（自己実現）

及ぼしているものと考えられる。(図2)

また、生活習慣の領域で差がみられたのは4項目である。地域により一定の傾向をみることはできないが、生活技術面の自立では東京B地区がやや遅い傾向を見せた。(図3) 項目内容は紀要22, 23集を参照されたい。

2. 各評定項目に対する母親の意見

子どもの行動発達の状態はそれらの行動に対し母親がどのような意見や期待をもつかということとの関連が考えられる。前年度(紀要第23集)は領域別得点から子どもの行動の発達変化と母親の意見の変化を比較した。今回は、各評定項目に対する母親の意見を、A. 子どもの年齢では当然できなければいけないと考えること、B. 今がこのことを身につける最良の時期であると考え、C. 子どもの年齢ではまだ要求するのは早すぎると考えること、の三段階に分けて、子どもの年齢と関連づけてその構成比を示した。(図4～5) 実線から下の部分がA段階、破線から下の部分がB段階、破線から上がC段

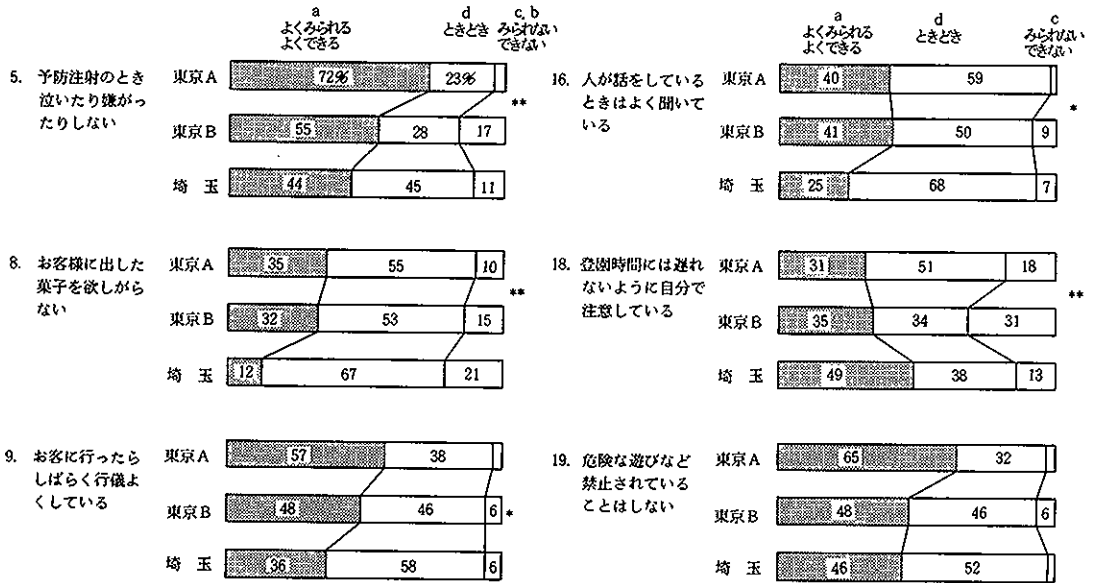


図2 発達状態の地域差 (自己統制)

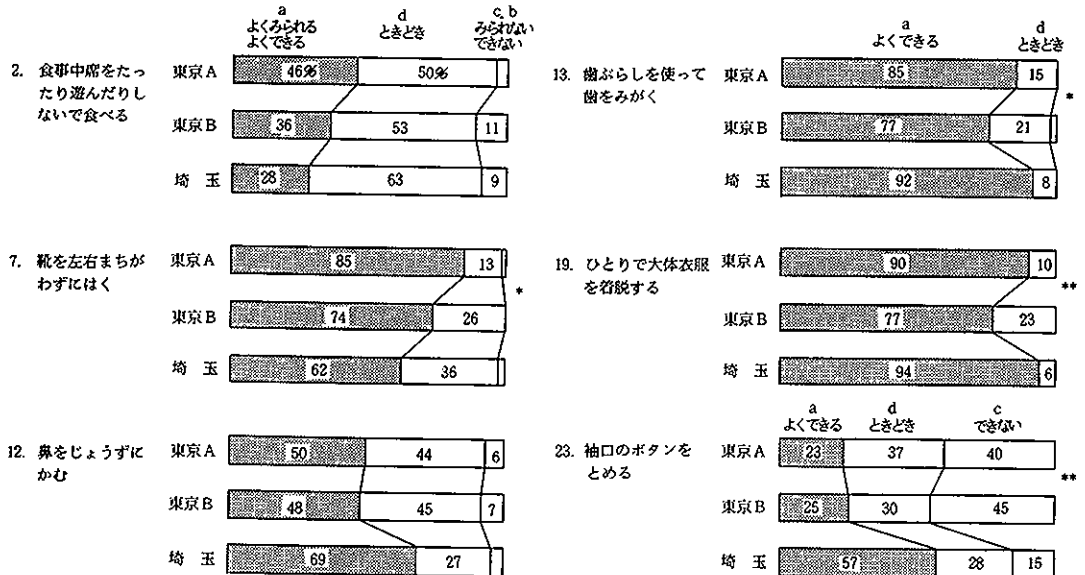
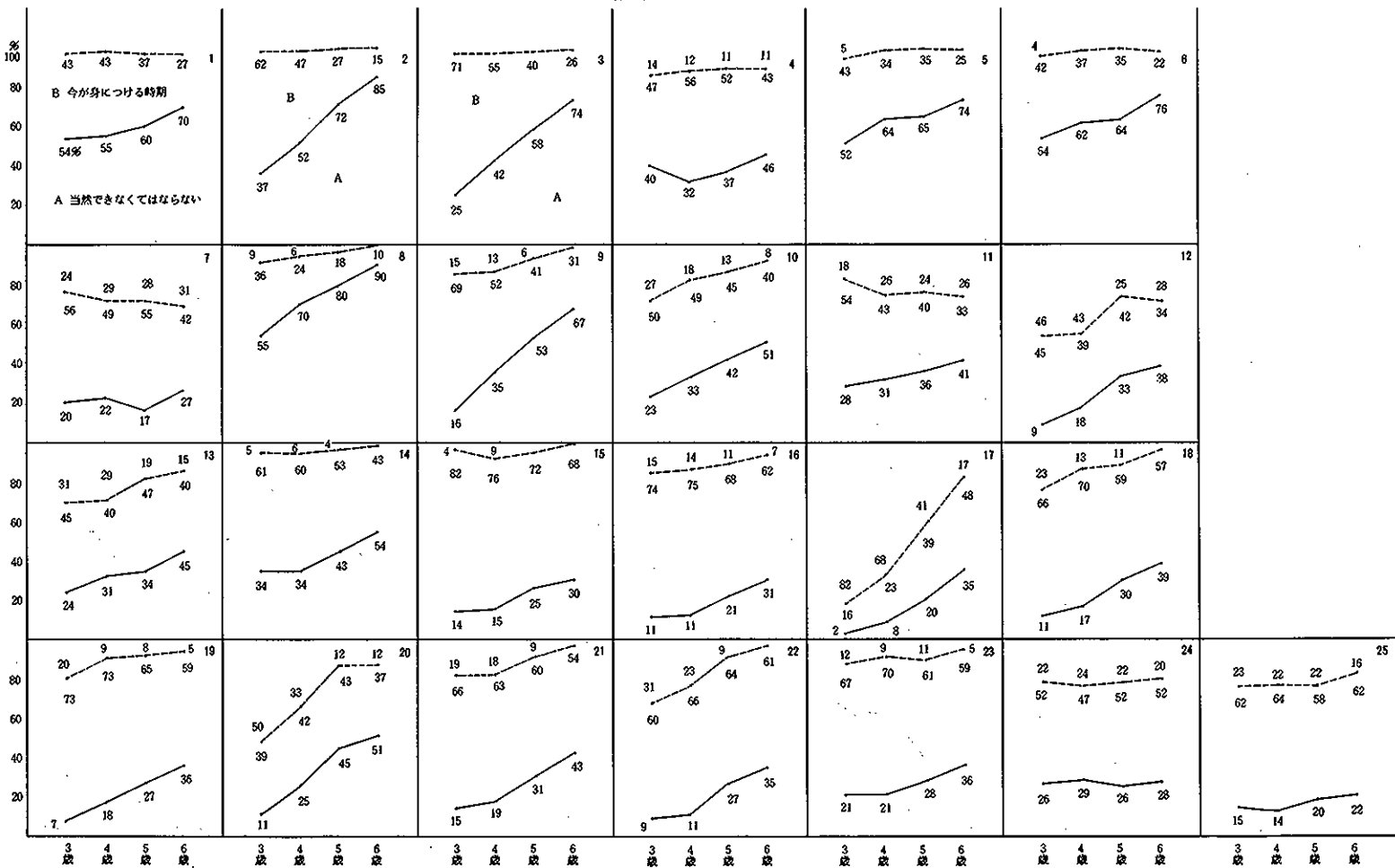


図3 発達状態の地域差 (生活習慣)

N = 3歳 94
 4歳 191
 5歳 247
 6歳 150

—— 評価Aの区分
 - - - 評価C + Dの区分



望月：幼児の自我の発達に関する行動評定

図4 自己実現 母の意見の年齢による変化

N = 3歳 94
 4歳 191
 5歳 247
 6歳 150

—— 評価Aの区分
 - - - 評価C + Dの区分

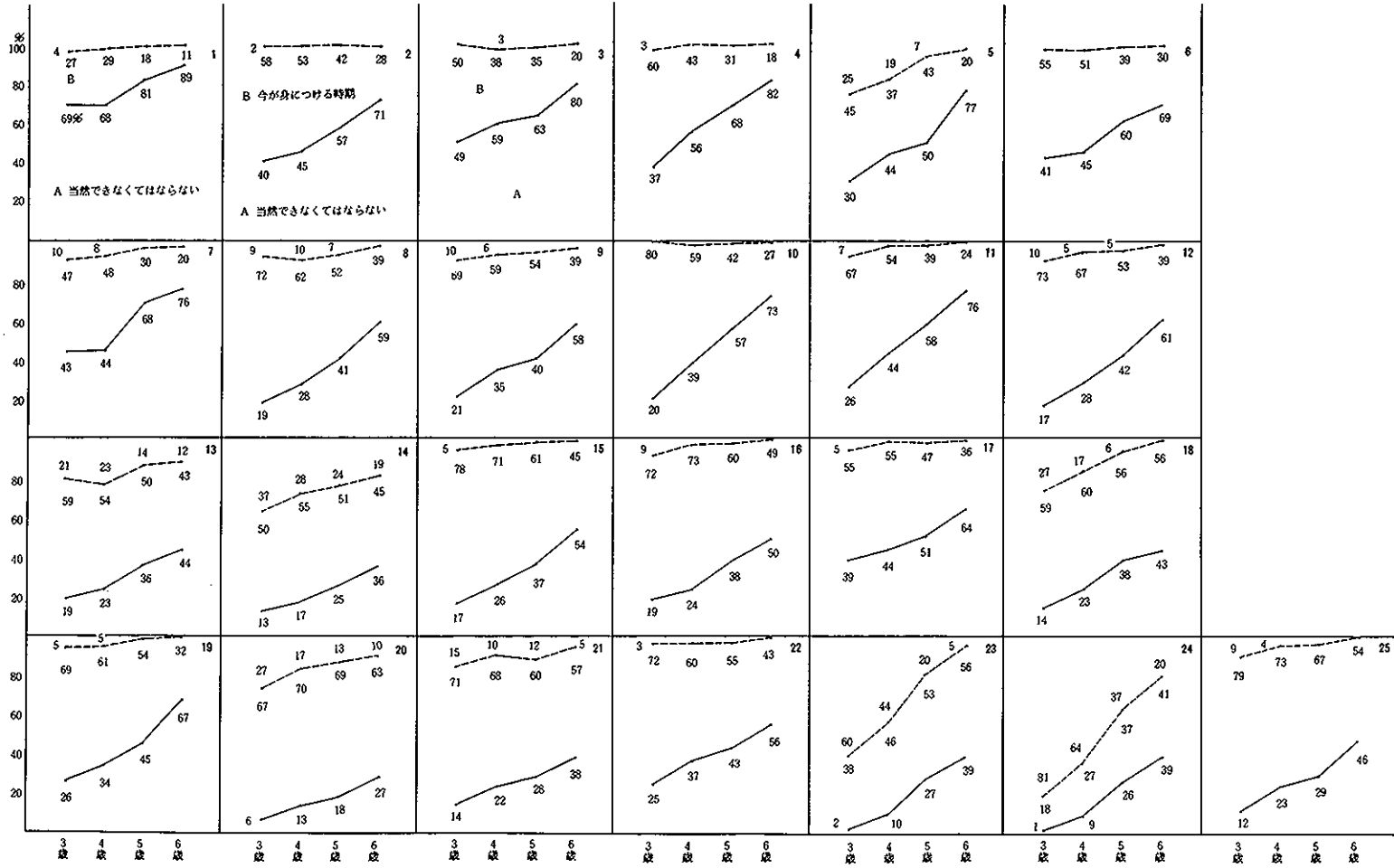


図5 自己統制 母の意見の年齢による変化

階の割合を示している。

子どもの発達状態（紀要第23集）と対比してみると、自己実現の領域では子どもの行動発達は概して母親の意見より先行する傾向を見せており、とくに項目1, 2, 5, 6, 10ではその差が大きい。これとは逆に、項目14では各年齢を通して子どもの行動発達に比し母親の期待が高く、項目4では5～6歳と年長になるほど母親の意見が子どもの行動を上廻って、主張できる子への期待が強かった。（図4）

これに対し自己統制の領域は母親の意見と子どもの行動発達の関連は強い。その中で比較的差がみられるのは11, 12, 13の3項目であり、母親の意見に比し子どもの行動発達が先行している。項目5, 6, 8, 16, 25では母親の意見と子どもの行動発達の関係は年少児と年長児

では逆転していて、年長になると母の期待が高くなることを示していた。（図5）

生活習慣の領域では項目2, 15, 17では子どもの行動発達に比べて母の意見、期待が大きく、大きな差をみせていた。また、各年齢を通して、子どもができない行動に対し今が身につける最良の時期だと考えているものに項目16, 17, 18, 23, 24, 25があって、これらについては子どもの行動に対する母の期待が大きいことを示していた。（図省略）

3. 母親の意見の地域差

母親の意見に地域差が見られたものは自己実現領域の5項目（図6）自己統制領域の4項目（図7）生活習慣領域の2項目（図8）であった、このうち、子どもの行動発達と強い関連を示しているものは自己実現領域では項目4, 9, 20, 自己統制領域では9, 生活習慣領域では23であり、他は子どもの行動発達との明らかな関連は認められなかった。

4. 母親の意見と発達

各領域別得点を平均値と標準偏差を基準にして、発達上位群、中間群、下位群にわけ、母親の意見を高期待群、

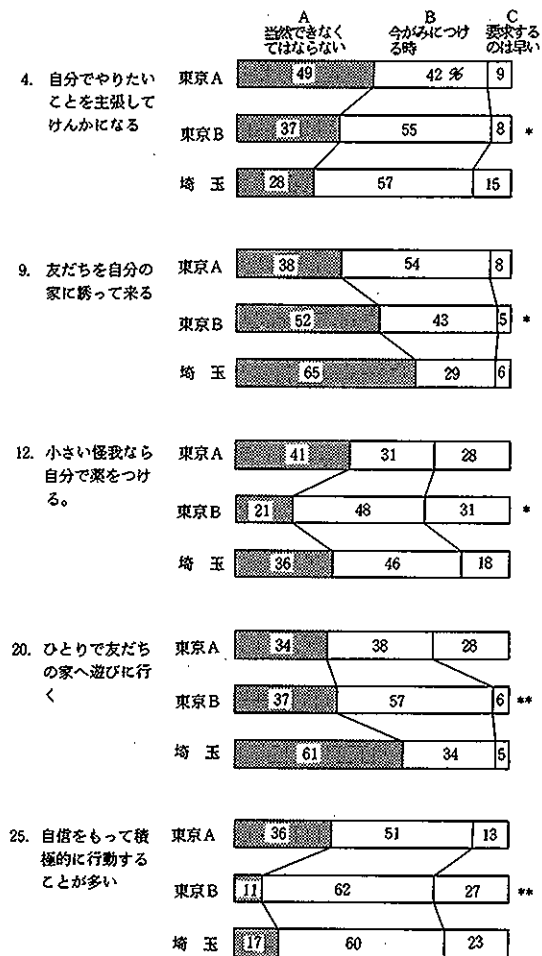


図6 母親の意見の地域差 自己実現

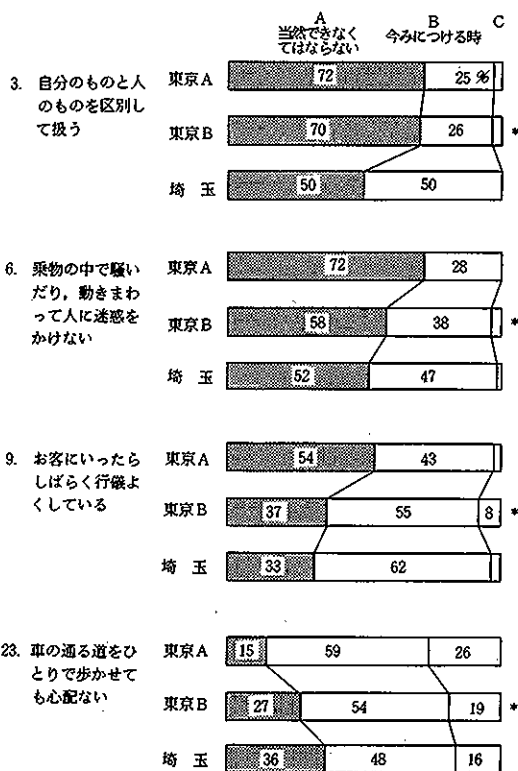


図7 母親の意見の地域差 自己統制

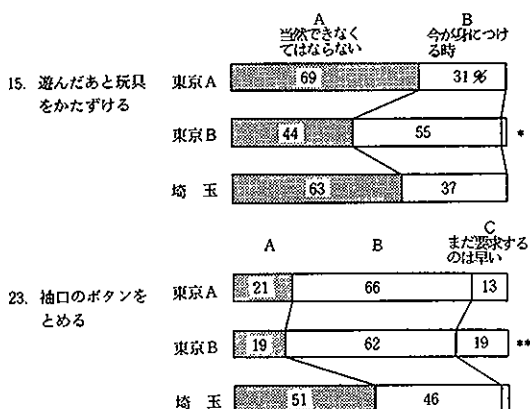


図8 母の意見の地域差 生活習慣

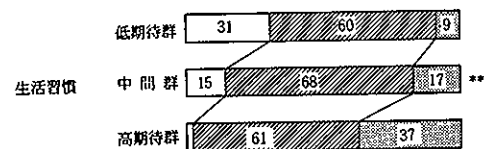
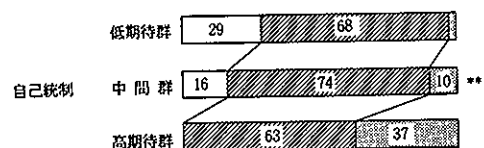
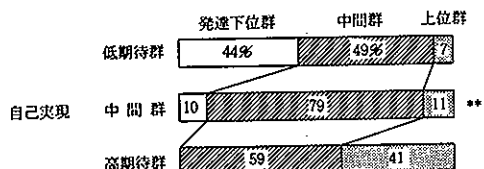


図9 母の期待と子どもの発達状態 (5歳)

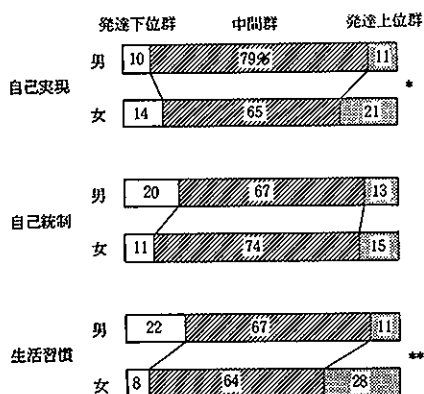


図10 性別からみた子どもの発達状態 (5歳)

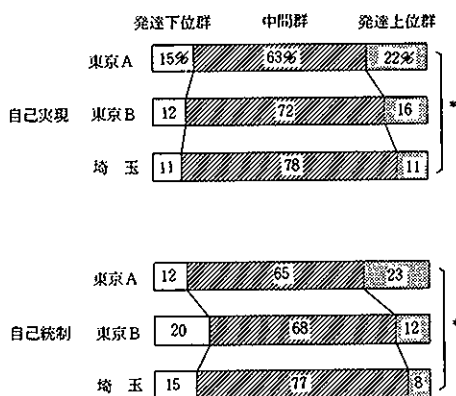


図11 地域別にみた子どもの発達状態 (5歳)

中間群、低期待群に分類してその構成比から総体的な検討をした。

図9にみられるように、いずれの領域も発達状態と親の期待との間には密接な関係があり、発達上位群は高期待群に多く、発達下位群は低期待群に多くなっていて、各年齢を通して明らかな差が認められた。

これに対し発達状態では自己実現、生活習慣の領域で性差がみられ(図10)、自己実現、自己統制の領域で東京A地区と埼玉地区の間に地域差が認められたが(図11)、親の期待ではやや同様の傾向はみられるものの有意差はなかった。

5. 領域別得点の相関

自我の発達を評定するために、自己実現、自己統制、生活習慣の自立の三領域を考えたが、それぞれの領域の相互関係や母親の意見との関連を検討した、表1は各領域相互の関係を年齢別に算出した相関係数で示したものである。これで見ると各領域は相互にかなり強い関連をもっており、とくに自己統制と生活習慣の自立とは関連が強いことがわかった。

また、子どもの自己実現、自己統制の行動と母親の意見との関連は3歳児が最も低く、年長になるに従って相関は高くなっていった。

6. 行動評定の実際的な適用

愛育相談所で扱ったケースのうち日常生活で適応上の

問題を示した8例について、母親に行動評定を依頼し、その結果を検討した。

各年齢毎に平均得点、標準偏差に基づいて、平均値を中心として上下各1標準偏差内を中間群とし、その上下をそれぞれ上位群、下位群として評定の基準にした。評定の基準点は表2に示した通りである。

表1 各領域の得点の相関

子どもの発達状態			
領域	相 関 係 数		
	3 歳	4 歳	5 歳
自己実現：自己統制	0.48	0.45	0.55
自己統制：生活習慣	0.51	0.57	0.58
自己実現：生活習慣	0.36	0.37	0.41
母の意見			
自己実現：自己統制	0.67	0.61	0.64
自己統制：生活習慣	0.71	0.74	0.66
自己実現：生活習慣	0.48	0.54	0.53
子どもの発達と母の意見			
自己実現	0.33	0.48	0.47
自己統制	0.37	0.49	0.51
生活習慣	0.54	0.58	0.46

表2 行動評定の基準点

		子どもの状態			母の意見		
		I 自己実現	II 自己統制	III 生活習慣	I' 自己実現	II' 自己統制	III' 生活習慣
3歳	上位群	35 ~	34 ~	33 ~	33 ~	35 ~	36 ~
	中位群	21 ~ 34	22 ~ 33	19 ~ 32	18 ~ 32	21 ~ 34	23 ~ 35
	下位群	~ 20	~ 21	~ 18	~ 17	~ 20	~ 22
4歳	上位群	40 ~	39 ~	39 ~	37 ~	39 ~	42 ~
	中位群	24 ~ 39	24 ~ 38	25 ~ 38	19 ~ 36	22 ~ 38	25 ~ 41
	下位群	~ 23	~ 23	~ 24	~ 18	~ 21	~ 29
5歳	上位群	41 ~	42 ~	43 ~	40 ~	43 ~	46 ~
	中位群	27 ~ 40	27 ~ 41	31 ~ 42	23 ~ 39	26 ~ 42	32 ~ 45
	下位群	~ 26	~ 26	~ 30	~ 22	~ 25	~ 31
6歳	上位群	42 ~	45 ~	45 ~	41 ~	46 ~	49 ~
	中位群	31 ~ 41	32 ~ 44	36 ~ 44	27 ~ 40	32 ~ 45	39 ~ 48
	下位群	~ 30	~ 31	~ 35	~ 26	~ 31	~ 38

また、全般的な傾向として三領域が関連をもちながら発達していることや、4~6歳児では子どもの発達と母親の意見はかなり高い相関を示していることから、三領域のバランス、子どもの発達状態と母親の意見のずれを評定のポイントと考えてみた。

各ケースの問題と行動評定の結果を表3に示した。子どもの状態を三領域から見たり、母親の考え方との関連をみることにより、問題の理解や指導のための示唆を得ることが可能であった。しかし、一方で母親の子どもの見方や評価上の問題が大きくなり、子どもの行動評定として単独に使用することには限界も感じられた。親子を理解するための手がかりを見つける一つの方法と考え、その結果の意味を慎重に検討することにより利用価値を見出すことができるものと考えた。

III 要 約

昨年度にひき続き自我の発達の行動評定のため、地域差、母親の意見から項目の検討を行った。

1. 自己実現の領域では項目4, 9, 10, 自己統制領域では5, 8, 9, 16, 生活習慣の自立では7, 13, 19, 23の各項目で子どもの発達の地域差が認められた。これらの項目は自己実現領域では東京A地区<東京B地区<埼玉地区の傾向がみられ、自己統制領域ではこれと逆の傾向がみられた。

2. 各項目に対する母親の意見を、子どもの年齢と関連づけて、A, B, Cの段階別に構成比で示した。

表3 行動評定を適用した事例

ケース	性	年齢	問 題	評定得点	評定からみた特徴
例1	女	6 ; 10	集団生活になじめない。初めに失敗したことは以後手を出さない。家では自分ができないと破いたりめっちゃめっちゃ書きをする。	I 17 I' 32 II 35 II' 36 III 48 III' 50	Iの得点が極めて低いわりにIIIが高い。III'が高く母の要求が高い。
例2	女	6 ; 8	遺糞、1日に3~4回も汚すが平気である。おんぶ、だっこなど母への要求が強い一方、母に対し反抗が強い。	I 42 I' 26 II 43 II' 23 III 36 III' 34	子どもはIIIを除く得点は比較的高位だが、母の意見はどの領域も低い。
例3	女	6 ; 3	わがまま、友だちとうまくいかず争いが多い。他家の物に何でも手を出し勝手に扱う。叱っても効果がない。	I 33 I' 34 II 28 II' 35 III 37 III' 40	IIの得点が低く、自己統制力の発達が遅い
例4	男	6 ; 3	友だちの中に入れたい、すねて臍をまげる。感情をストレートに出せない。いじわるされても笑ってごまかし、家で荒れる。	I 26 I' 35 II 39 II' 34 III 32 III' 36	I, IIIの得点が低く、自発的行動や生活面の自立が遅い。
例5	男	6 ; 0	保育所通園をいやがる。ちょっとしたことで荒れて乱暴し、集団生活に適應できない。	I 19 I' 43 II 24 II' 39 III 36 III' 46	I, IIの得点が低い、母の意見とのギャップが大きい。
例6	男	5 ; 3	おちつきがない。集団生活で、きょろきょろしたり人の話をきかず注意を受けることが多い。ちょっとしたことで泣く。	I 26 I' 33 II 18 II' 46 III 40 III' 42	I, IIの得点が低い。II'がとくに高く、母の意見とのギャップが大きい。
例7	男	5 ; 1	マイペースで、自分の好き勝手なことをしていて集団についていけない。人と協調できず、友だち遊びからはずれる。	I 18 I' 34 II 18 II' 33 III 25 III' 39	全領域の得点が低い。母の意見は中庸だが、子どもの状態とずれる。
例8	男	4 ; 8	チック、幼稚園へ行き渋る。いらいらして泣いて、ちょっとしたことで怒り、泣く。	I 26 I' 33 II 24 II' 23 III 27 III' 30	評定からはとくに問題になりそうな特徴はとらえられない。

3. 母親の意見で地域差が認められたものは、自己実現5項目、自己統制4項目、生活習慣の自立2項目であり、このうち自己実現の4, 9, 20, 自己統制の9, 生活習慣の23の各項目では、子どもの発達にも地域差が見られており、地域による母親の意見の差が反映されていた。

4. 総体的にみると子どもの発達上位群は母親の意見の高位群にその割合が多く、発達と母親の意見は密接な

関連をもっており、年齢が長ずるほどその傾向がみられた。

5. 行動評定を実際に適用した結果、子どもの理解や指導のために示唆を得ることができたが、母親の評価の不安定さもあり、限界があった。

本研究は立正短期大学野田幸江の協力を得てすすめたものである。

Behavior Evaluation in Reference to the
Ego Development of Preschool Children

Takeko Mochizuki

As the 3rd step of this study, the difference of mothers' opinions among their living areas in behavior evaluation of preschool children's ego development was investigated.

The difference among areas was significantly shown in 3 items of Self Assertion, 4 items of Self Control and 4 items of Establishment of Daily Life Habits. In Self Assertion, the score of child development was highest in Saitama area, then in Tokyo B area and that of Tokyo A area was the lowest. In Self control, the outcome was contrary to that of Self Assertion.

The difference among mothers' opinions was significantly shown in 5 items of Self Assertion, 4 items of Self Control and 2 items of Establishment of Daily Life Habits. Of those items some were accompanied with the difference among areas, so that the difference of mothers' opinions in each area was reflected to these outcomes.

Generally speaking, the high association between mothers' opinions and child development was shown particularly in older preschool children.

As the result of practical application of the behavior evaluation scale, it had a merit for understanding and guidance of children and their mothers, however, it had a limit for getting a stable mothers' evaluation.